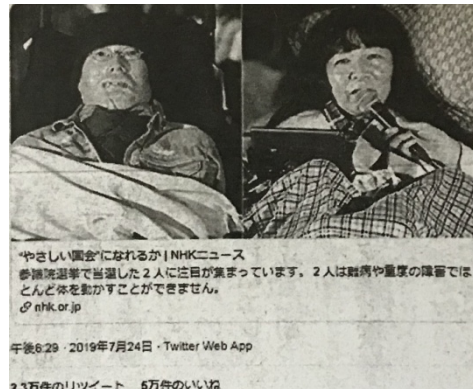


重度障害者の議員

写真は東京新聞7月30日朝刊「こちら特報部」。
リードから一参院選で初当選を果たした重度障害者の船後靖彦氏と木村英子氏に対し、ツイッターで、2人が国会に登壇するのは「迷惑行為」とする投稿が行われ、趣旨に賛同することを意味する「いいね」が5万件（29日現在）も寄せられた。付けた人の中には、嫌韓などをうたうネット右翼（ネトウヨ）的な思想の人もいるが、普段の投稿から政治色が見えない人も少なくない。参議院は2人のためにバリアフリー化を進めているが、重度障害者の国会登壇は「迷惑行為」なのか。



2人の国会登壇を「迷惑行為」とする見方に対し、「日本障害者協議会」の藤井克徳代表は「承服できない。人間は死ぬ時、何らかの障害があって逝くわけで、自分ごととして捉える想像力がほしい。すべての法の制定過程に障害者の視点が入ることは有効だ」と反論する。「日本ALS協会」の大山孝二常務理事は「今後、二人の国会での活動や工夫を見てほしい。障害者にとっていかに不自由な社会なのか、多くの人を知るだろう。迷惑どころか、障害者を取り巻く課題解決の糸口になる」と語る。

れいわの山本太郎代表は「パラリンピックのホスト国でもある日本の人々が、日ごろ障害者に抱いている思いがあぶり出された分かりやすい現象」と話し、二人に期待を込める。「体が不自由で寝たきりだったとしても、働くことができ、充実した人生を送れる。それを体現し、議論の先頭に立つてくれることで障害者に対する考え方をアップデートしてくれるだろう」

「マイノリティの社会進出や権利獲得を苦々しく思う人は一定数存在し、批判する機会をうかがっている。障害者への差別的言説は在日コリアンほど露骨にできない。最大限できるのが『国会議員が務まらない人が議員になってはいけない』という能力主義的な形態だ」と指摘するのは、排外主義の動向に詳しい徳島大の樋口直人准教授（社会学）。例えば、議員活動中は介護サービスの公費負担が打ち切られるとし、制度改善を訴えた木村氏に対し、好意的な人は制度の矛盾を明らかにし、障害者の働く環境を整えることが、社会を良くすると考える。だが、否定的な人は「こういう人が国民の代表になるのは無理」と考えるという。

樋口氏は『障害者では無理』の根拠を常に探し、何を見てもその根拠を強化するものとして考える。抗議や差別自体が目的なので、それが可能なネタを探し、反応する。女性議員に限って資質が妙に問われるのと同じだ。門前払いされる外国人と違い、ヘイトを正当化する論拠に能力主義が持ち出されるのが、女性と障害者の共通点だ」

(2019年8月6日)